

外部評価報告書

令和元年8月

静岡大学理学部

目 次

I	まえがき	1
II	外部評価委員会実施要領	2
III	外部評価委員会記録	3
IV	外部評価委員会質疑応答	5
V	外部評価結果調査票まとめ	8
VI	あとがき	18
資料 1	外部評価委員会説明スライド	19
資料 2	外部評価結果調査票（様式）	59

I まえがき

本報告書は、6年に一度実施する組織評価に係るものです。組織評価の目的は、教育、研究活動等の質的向上を図るというもので、この組織評価は、本学部が行う自己評価の部分と、その自己評価結果に基づく外部評価の部分からなります。自己評価結果に基づく外部評価の部分を取りまとめたものが本報告書です。

まず、平成25年度から平成30年度までの6年間の主な新しい取組を述べます。本学部では、国際化の推進が過去2回の外部評価で検討課題として取り上げられた経緯を踏まえ、新たな教育プログラムとして、自主的な研究者の育成、先端科学・イノベーション・社会への視点の涵養、国際的視点と科学英語力の養成を目的に、創造理学（グローバル人材育成）コースを平成28年度に設置しました。本コース学生を対象に、香港科学技術大学への短期語学研修派遣を実施し、国際的視点と科学英語力の育成を図り、それを経験した学生が長期交換留学に参加したことは、国際化推進の成果の1つです。この他、「ビキニ海域における水爆実験による第五福竜丸の被災事件」を契機として設立された放射科学研究施設を平成28年度に放射科学教育研究推進センターへ改組し、放射科学教育という特色ある教育プログラムを展開しています。また、インターンシップの単位化によるキャリアアップの支援に加え、平成29年度から「理学部産学交流会」を実施し、前回の外部評価で取り上げられたもう1つの検討課題であった「学生への就職支援体制」の改善を図りました。

上述の検討課題への取組に加え、真理の解明という本学部の理念を軸に、国際的な研究論文、学会発表による研究成果の公表をはじめ、大学院への進学を視野に入れた高度な専門教育の推奨といった本学部の教育目標に向けた取組を実施しました。さらに、一般市民を対象とした「サイエンスカフェin静岡」を定期的で開催するとともに、小中高生を対象とした「未来の科学者養成スクール」の運営へ関与しました。このような教育、研究、地域貢献等の様々な領域で、職員の支援のもと教員が取り組んだ実績、及び、内部質保証システム、組織としての運営機能等に対して、自己評価を行いました。

外部評価の実施にあたっては、理学同窓会会長の浅野安人・(株)SGKシステム技研顧問、大学の教育研究に携わっておられる石原秀樹・大阪市立大学大学院理学研究科教授、高等学校の教育に精通されている嶋照生・静岡県立富士宮西高等学校校長、企業からの視点で評価をお願いした服部俊治・株式会社ニッパイオマトリックス研究所顧問研究戦略責任者の4名の皆様に外部評価委員をお引き受け頂きました。委員の皆様には、外部評価委員会での自己評価結果に対する貴重なご意見・ご提言に加え、ご多忙の中、外部評価調査結果票を作成頂きましたことに厚く御礼申し上げます。今後は、頂きましたご意見等を真摯に受け止め、本学部の発展に向けて改善努力する所存です。

令和元年 8 月
静岡大学理学部長
田中 直樹

II 外部評価委員会実施要領

1. 外部評価の目的

学外の有識者に評価委員を委嘱し、静岡大学理学部の教育、研究、社会連携、国際交流及び組織について、評価及び将来への提言を受け、本学部の諸活動の改善、活性化に役立てるものとする。

2. 外部評価の実施方法

- (1) 自己評価書、参考資料及び外部評価結果調査票を事前に外部評価委員に送付し、事前調査を受ける。
- (2) 外部評価委員会を開催し、組織の概要・自己評価結果の説明と質疑応答を行う。
- (3) 外部評価委員会から、委員会開催当日に、事前調査及び当日調査の結果に基づき講評を受ける。
- (4) 外部評価委員から、事前調査及び当日調査の結果に基づき、後日、外部評価結果調査票の回答を受け取る。
- (5) 外部評価結果を報告書にまとめて公表する。

3. 外部評価の日程

平成31年 1月	外部評価委員の推薦及び委嘱
3月上旬	自己評価書の作成
令和元年 6月上旬	自己評価書、資料及び外部評価結果調査票を外部評価委員に送付
6月27日	外部評価委員会開催
7月中旬	外部評価委員から外部評価結果調査票の提出
8月上旬	外部評価報告書のとりまとめ
8月下旬	外部評価報告書の公表

Ⅲ 外部評価委員会記録

2019年度 静岡大学理学部外部評価委員会

1. 日 時 令和元年6月27日(木) 14:00～16:00 (2時間)
2. 場 所 理学部大会議室(理学部A棟2階) 【委員控室:小会議室】
3. 外部評価委員(敬称略)
浅野 安人(静岡大学理学同窓会会長、(株)SGKシステム技研顧問)
石原 秀樹(大阪市立大学大学院理学研究科教授)
嶋 照生(静岡県立富士宮西高等学校校長)
服部 俊治(株式会社ニッピバイオマトリックス研究所顧問 研究戦略責任者)
3. 実施内容
14:00 外部評価委員会開始
出席者紹介・・・田中理学部長
日程説明・・・土屋自己評価委員長
14:05 自己評価報告書説明
土屋自己評価委員長
14:50 休 憩
15:00 質疑応答
16:00 外部評価委員会終了

理学部外部評価委員会出席者名簿

【外部評価委員：4名】

氏名	所属等
浅野 安人	静岡大学理学同窓会会長、(株)SGKシステム技研顧問
石原 秀樹	大阪市立大学大学院理学研究科教授
嶋 照生	静岡県立富士宮西高等学校校長
服部 俊治	株式会社ニッピバイオマトリックス研究所 顧問 研究戦略責任者

※50音順

【理学部関係者：12名】

氏名	所属等
田中 直樹	理学部長(数学科 教授)
北村 晃寿	副学部長(副領域長)(地球科学科 教授)
岡林 利明	副学部長(化学科 教授)(化学科長代理)
土屋 麻人	自己評価委員会委員長(物理学科 教授)
塚越 哲	自己評価委員会副委員長(地球科学科 教授)
小林 健二	自己評価委員会前委員長(化学科 教授)
浅芝 秀人	数学科長
佐藤 信一	物理学科教授(学科長代理)
鈴木 雅一	生物科学科長
木村 浩之	地球科学科長
坂本 健吉	附属放射科学教育研究推進センター長(化学科 教授)
竹内 浩昭	創造理学コース長(生物科学科 教授)

【陪席：3名】

氏名	所属等
鈴木 正人	事務長
小澤 則人	総務係長
川崎 里恵	学務係長

IV 外部評価委員会質疑応答

土屋自己評価委員長によるスライドでの理学部の自己評価書の概略説明に対して、質疑応答が行われた。その要約を以下に示す。

<質疑応答>

【石原委員】 先に確認したいことは、この評価は文科省に提出するのか？

【回答】 文科省に提出するかは分からないが、平成25年度の外部評価結果はホームページ上にアップされている。

【石原委員】 新設の創造理学コースと同様のものが大阪市立大学にもある。この制度はうまく機能しているのか、問題点はないか？

【回答】 1年次のガイダンスで履修モデルを提示している。学生からは広く学べて良かったという声があるが、履修科目が多くて大変だという声もある。

【石原委員】 大阪市立大学の場合には、例えば、物理学科に進学する学生は、必修科目が多く、1年次から物理学科と同じ授業を履修することになり、結局、理念と実態がかみ合っていない。

【回答】 1年次前期には3学科程度の進級を考えているが、後期には2学科進級に絞っているようだ。

【服部委員】 最終的には5学科の卒業になるのか？

【回答】 5学科の卒業で、卒業証書に創造理学コースの名称が記載される。コースの1期生は現在4年生なので、今回の評価時には、質問内容に関するデータが出てくる。創造理学コースは、英語の授業もあるので、学生にとって大変であるが、保護者への説明には同じ授業料で2倍の得があると説明している。また、コミュニケーション能力が高いという評価がある。

【服部委員】 基準3で、専任教員の女性比率の基準に関してどのような評価対象になっているのか？

【回答】 大学として達成しなくてはならない数値のため、全学で取り組んでいる。理学部としても現在進行している人事を含めて16%の目標を達成する努力を行っている。

【石原委員】 学科の名称について、生物科学科、地球科学科という名称の由来についてお聞きしたい。

【回答】 5学科のうち、最も設置が遅かったのは地球科学科である。その後の博士課程の設置に伴い、生物学科と地球科学科が改組し生物地球環境科学科となった。その後、両学問分野の進展を踏まえ、分離した際に、地球科学科と生物科学科となった。生物科学科に関しては構成員の専門性を踏まえ、その名称になった。

【石原委員】 放射科学教育の内容はどのようなものか？

【回答】 放射科学教育研究推進センターのHPへ記載の以下が紹介された。

放射化学（現：放射科学）研究施設は「ビキニ海域における水爆実験による第五福竜丸の被災事件」を契機として設立されました。設立当初は啓蒙活動から始まりましたが、現在では放射線や放射性核種を利用した基礎的および応用的研究を学生とともに行っていきます。またそれらの安全な取り扱いのための教育および管理を教職員一同で行っています。

【嶋委員】 不登校の学生も多く、入学後の学生の状況や支援を知りたい。また、卒業後の奨学金返済が困難なケースがあるが追跡調査を行っているのか？

【回答】 今回の資料にはない。大学としては学生支援センター、こころの相談室、保健センターで対応しており、また担任、指導教員、授業担当者が情報収集を行って対応している。約8割の学生は4年間で修了しており、2割程度の学生が卒業するのに困っている。成績不良者については調査を行っている。1・2年次の指導教員は、以前は1名だったが2名体制として学生の対応を厚くしている。また、全学的には1年次前期に新入生セミナーを行って、大学への導入をうまくいくように行っている。

【石原委員】 活動状況報告の提出や教員データベースの入力など、教員への負担増になっていないか？また、人事評価で、業績を処遇に反映させるとあるがどのように行っているのか？

【回答】 教員データベースから活動状況報告への自動変換については、全学でも要望が出されているが行われていない。処遇に関しては取り決めに沿って行っている。

【石原委員】 処遇に関する不服申し立てはないか？

【回答】 ない。

【服部委員】 早期研究室配属の制度化は評価できるが、学生の雰囲気はどうか？

【回答】 早期研究室配属に関しては1学年が45名と多い上に、学生への公平性の担保が難しい上、教員の事務処理の煩雑化及び研究レベルの進展等などで負担が多くなっており、早期研究室配属へ対応できるほどの時間的余裕がない。これらのことがあるが、できる限りの努力をしている。なお、創造理学コースには、2・3年次の実践演習で早期研究室配属の制度がある。

【石原委員】 前期、後期、A0、推薦入試などの多様な入試を実施しているが、多様な人材が育成できているのか？また、追跡調査をしているのか？

【回答】 多面的評価型入試は2年後にさらに行うことになっている。多様な人材育成に関しては、創造理学コースはその目的に向かって行っている。本資料にはデータはないが、入学時の入試形態と成績などの情報はあるので解析はできる。

【嶋委員】 理学部の運用に関しては研究費の確保は重要だが、一法人二大学化による研究費の配分への影響はあるのか？

【回答】 一法人二大学化に関しては、短期間に大きな改革を行うことになるが、様々な問題が出ている上、学内の意見統一が進んでいるわけではない。一法人二大学化による研究費の配分に関しては、国立大学法人静岡国立大学機構設立及び大学再編に関する合意書に付随した確認書にある第3、4、5の紹介(運営経費・教育研究環境は統合・再編を理由として現時点での水準を下回ることにならないように措置する)があった。なお、平成28・29年度の科研費は基盤研究Sが採択されている例外的な期間であり、当該研究代表者は平成30年度4月に転出している。この基盤研究Sの経費を除くと、平成27年度は105,300千円、28年度は84,400千円、29年度は76,650千円、30年度は60600千円で減っており、31年度は途中までだが75300千円でやや増加した。科研費の採択には国際誌への掲載が重要だが、教員の負担増もあり、研究時間の確保が難しい状況にある。

【服部委員】 研究費の獲得に関しては特許取得が有効だが、その申請件数が少ないのはなぜか？

【回答】 理学部の多くの教員は実学研究でないので、特許の申請件数が少ない。今後、理学部の中で特許に関して意識を変えていく必要があると思われる。

【石原委員】 大学院での学位の取得状況はどうか？

【回答】 修士への進学率は50%程度で、博士課程への進学はほとんどない。修士・博士課程については組織が違うので、この資料にはデータは掲載されていない。

以上

V. 外部評価結果調査票まとめ

外部評価委員（A～Dの4名、順不同）より、自己評価報告書に基づく事前の検討、大学での説明・質疑応答を含む外部評価委員会、および事後の検討を経て提出いただいた外部評価結果調査票（フォーマットは、資料1参照）における評価点および評価コメントをまとめて以下に示す。

《外部評価結果調査票における評価点のまとめ》

各基準の評価は1～4段階

- 4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。
- 3：概ね達成している。概ね適切・良好である。
- 2：改善が必要である。
- 1：抜本的な改善が必要である。

項目		外部評価委員				平均評価点
		A	B	C	D	
基準1	組織の目的	4	4	4	4	4
基準2	教育研究組織構成	4	4	4	3	3.75
基準3	教員及び教育支援者等	4	3	3	3	3.25
基準4	学生の受入	4	3	4	4	3.75
基準5	教育内容及び方法(学士課程)①	4	4	4	4	4
基準6	学習成果	4	3	4	4	3.75
基準7	施設・設備及び学生支援	3	4	3	4	3.5
基準8	内部質保証システム	4	4	4	3	3.75
基準9	財務基盤及び管理運営	4	2	3	2	2.75
基準10	教育情報等の公表	4	4	4	4	4
基準11	研究活動の状況及び成果	4	4	4	3	3.75
基準12	地域貢献活動の状況	4	4	4	4	4
基準13	国際化の状況	4	3	4	3	3.5

《外部評価結果調査票におけるコメントのまとめ》

【基準1】組織の目的について

理学部の目的（使命、教育研究活動を展開する上での基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が学校教育法に規定されている、大学一般に求められる目的に適合するものであるか。

A委員：評価点〔4〕

理学部の目的が、静岡大学学則に基づいて、理学部規則等に明確に定められており、その内容も学校教育法に規定されている。大学一般に求められる目的に適合するものである。

B委員：評価点〔4〕

理学部の目的が明確に定められており、学校教育法に規定されている「大学一般に求められる目的」に適合していると判断します。

創造理学コースは、卒業生の輩出を待ち、創設の理念が達成できるか継続的な検証を望みます。

C委員：評価点〔4〕

(優れた点・更なる向上が期待される点)

目的は明確であり、その内容は学校教育法に規定されている、大学一般に求められる目的に適合していると考えます。

(改善を要する点)

各学科の目的において、数学科が教育者の養成に限定されていることについて疑問を感じました。また、生物科学科の目的が生物学科とどのように異なるのかという点について読み取ることはできませんでした。この点の改善を望みます。

D委員：評価点〔4〕

組織の目的については、よく考えられていると思います。

放射線安全教育は特色が出ていて良いと思います。

【基準2】教育研究組織構成について

教育研究に係る基本的な組織構成（学科、専攻、その他の組織の実施体制）が、理学部の目的に照らして適切なものであるか。

教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能しているか。

A委員：評価点〔4〕

教育研究に係る基本的な組織構成は、理学部の目的に照らして適切なものである。

各種委員会の委員構成など教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備されている。

B委員：評価点〔4〕

学科の構成など、理学部の目的に照らし適切なものと判断します。

目先の要請に左右されず、歴史に耐える教育研究体制の構築を期待します。

放射科学教育研究推進センターは、特色あるものと思います。

C委員：評価点〔4〕

(優れた点・更なる向上が期待される点)

組織構成は適切であり、教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能していると考えます。創造理学コースの設置は、現在求められているニーズに合致しており、素晴らしい取り組みだと考えます。

(改善を要する点)

教授会が助教以上の全ての教員によって構成されているが、外部から見るとわかりにくく、教授だけで構成されている組織に見えます。適切な名称となることを望みます。

D委員：評価点〔3〕

創造理学コースについて、意欲的な取組でよいと思うが、学生・教員の負担など不安要素もあり、今後卒業生の動向を定期的に調査し、必要なら手直し・廃止を含め柔軟に対応して欲しいと考える。

【基準3】 教員及び教育支援者等について

教育活動を展開するために必要な教員が適切に配置されているか。

教員の採用及び昇格等に当たって、明確な基準が定められ、適切に運用されているか。
また、教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に実施され、教員の資質が適切に維持されているか。

教育活動を展開するために必要な教育支援者の配置や教育補助者の活用が適切に行われているか。

A委員：評価点〔4〕

教育活動を展開するために必要な教員は適切に配置されている。

教員の採用及び昇格等に当たって、明確な基準が定められている。

教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に実施され、教員の資質が適切に維持されている。

教育活動を展開するために必要な教育支援者の配置や教育補助者の活用が適切に行われている。特に大学院生をTAとして採用し、学部学生に対する実験・実習・演習等の教育補助業務に従事させているのは、学部教育の充実と大学院生への教育トレーニングには有効である。

B委員：評価点〔3〕

限られた教員数の中で、教育のために適切な配置がなされていると考えます。

教育や研究の成果の評価は長い時間が必要と思います。表面に現れるわかりやすい視点だけで評価がなされないよう配慮されることを望みます。

C委員：評価点〔3〕

(優れた点・更なる向上が期待される点)

教員が適切に配置されており、採用及び昇格等も適切に運用されていると考えます。また、評価を継続的に実施することによって教員の資質が適切に維持され、教育支援者の配置や教育補助者の活用も適切に行われていると考えます。

(改善を要する点)

人件費ポイントが毎年0.5%減となっているのは残念です。質の高い研究・教育等を維持するためには一定の人数が必要です。効率とは異なる価値基準を持って教員等を配置することを望みます。

D委員：評価点〔3〕

基準は充足しており、良いレベルと思う。

一方、質的に教授が重く、年齢構成も高い。教員の流動性が低いことが推測される。静岡の内で閉じた人的交流で満足せず、転出・転入のチャンス、外でも通用する人材育成と外からの転入を真剣に考えて欲しい。

また、女性比率が目標に至っているとは言え、低いように思われる。特に教授。

【基準4】 学生の受入について

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されているか。

実入学者数が入学定員と比較して適正な数となっているか。

A委員：評価点〔4〕

一般入試、AO入試、推薦入試、ABP入試等の入学者受入方針が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されている。

各学科、及び創造理学コースともに実入学者数が入学定員と比較して適正な数となっている。

B委員：評価点〔3〕

入学者受入方針が明確に掲げられています。

多様な入試が行われていますが、公正な入試のために多大な労力がはらわれていると想像します。それに見合うような学生が受け入れられているか、追跡調査などを望みます。

C委員：評価点〔4〕

(優れた点・更なる向上が期待される点)

入学者受入方針は明確であり、それに沿った適切な学生を受け入れていると考えます。また、実入学者数も適正な数となっていると考えます。

(改善を要する点)

大学入試センターで課す科目が、創造理学コースのみ異なることに疑問を感じます。入学を期待する学生像として幅広い基礎知識を求めるのならば、他と一緒にの方が良いと考えます。

D委員：評価点〔4〕

入学数は適正と思われる。

入試の形態はバラエティに富んでいるが、教員・事務の手間を考慮してそれに見合った多様性が得られているのかはよく吟味する必要があると考える。

意外に学力テストのみに徹して大学が求める学生像を他大学と差別化することも一案ではないか。

【基準5】教育内容及び方法について

① (学士課程)

教育課程方針(カリキュラム・ポリシー)が、学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)と整合的であるか。

教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されているか。

学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われているか。

教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか。

A委員：評価点〔4〕

教育課程方針が、学位授与方針と整合的である。

教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であり、それにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されている。

学位授与方針が明確に定められ、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっている。

学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われている。

B 委員：評価点〔4〕

学士課程における教育課程方針は、学位授与方針と整合的であると判断します。教育課程も適切に編成されています。また、要指導学生についての配慮もなされており、きめ細かな指導が実施されています。

C 委員：評価点〔4〕

(優れた点・更なる向上が期待される点)

教育課程方針は学位授与方針と整合的であり、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されていると考えます。また、教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、そして体系的に編成されており、その内容、水準は学位名において適切であると考えます。さらには、授業形態、学習指導法等も整備されていると考えます。学位授与方針も明確に定められ、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっており、適切な履修指導、支援が行われていると考えます。

(改善を要する点)

基礎学力不足の学生への対応が高校と変わらないことが気になります。大学生に適した指導となることを望みます。

D 委員：評価点〔4〕

内容にまで立ち入れないので、適切に運用されていると考える。

理学部らしい、フィールドや早期配属プログラムなど、教員の余計な負担を減らしてあげて、学生と対面する時間を増やしてあげたい。

※②（大学院課程）は省略

【基準6】学習成果について

教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっているか。

卒業（修了）後の進路状況等から判断して、学習成果が上がっているか。

A 委員：評価点〔4〕

学習成果は、学生自身の努力によるものではあるが、教育環境としては、例えば化学科の多くの学生が、早期履修制度を利用しており、地球科学科や他の学科でも、その成果が各種学会での表彰を受けることに反映されている。

また、卒業（修了）後の進路状況等から判断しても、各分野で活躍しており学習成果が上がっていると判断される。

B 委員：評価点〔3〕

学習の成果はおおむね良好だと判断します。

英語の能力、国際的視野を身につけるのは、専門的分野で自分のものをもってからでも遅くないように思います。

C 委員：評価点〔4〕

(優れた点・更なる向上が期待される点)

学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっていると考えます。

(改善を要する点)

「教員と話をする機会が少ない」ことが気になります。研究室の活用などを行

うことにより、教員と学生の距離が近い関係になることを望みます。

D委員：評価点〔4〕

学位、教員免許、放射線取扱主任など、成果が上がっていると思われます。
他に毒物取扱とか危険物とかの合格があれば出してもよいのでは？

【基準7】施設・設備及び学生支援について

教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されているか。

学生への履修指導が適切に行われているか。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われているか。

A委員：評価点〔3〕

英会話能力の向上が見込まれる創造理学コースの今後の発展に期待が持てる。
理学部発足当初の昭和40年代と比較すると、環境面での改善はかなり進んでいると思われるが、下記の改善点が望まれる。

- 1) ネット環境の整備。
- 2) リーダーシップを発揮させることのできる防災マイスター資格の取得や、課外活動の奨励。
- 3) 返済義務のない(民間・公的)奨学金制度の拡充。

B委員：評価点〔4〕

施設・設備はおおむね整備されていると判断します。
複数担任制など、丁寧な学生へのケアが行われていると思います。

C委員：評価点〔3〕

(優れた点・更なる向上が期待される点)

限られた予算の中、施設・設備等が整備され、有効に活用されていると考えます。また、学生への履修指導や学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われていると考えます。

(改善を要する点)

理学部棟の老朽化が気になります。予算が足りないことも十分理解しておりますが、学生に良い環境を提供するためにも予算の獲得を切望します。

D委員：評価点〔4〕

施設・設備は適切に運用されている。
学生への支援も良いと思う。

【基準8】内部質保証システムについて

教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能しているか。

A委員：評価点〔4〕

学期の中頃の「コメントペーパー」、各授業の最終回の「授業アンケート」等による授業の評価結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備

されている。

B委員：評価点〔4〕

授業アンケートが実施され、その結果をフィードバックさせているなど、教育の質改善に真摯に取り組んでいると判断します。

また、教職員の研修も適切になされていると判断します。

C委員：評価点〔4〕

(優れた点・更なる向上が期待される点)

教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能していると考えます。また、教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能していると考えます。

(改善を要する点)

学生の評価能力に関する検証を行うことを望みます。

D委員：評価点〔3〕

授業アンケートに振り回されて難しい授業をやめて、学生に迎合させるような圧力にならないことを望みます。

【基準9】財務基盤及び管理運営について

管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能しているか。

教員と事務職員等との役割分担が適切であり、これらの者の間の連携体制が確保され、能力を向上させる取組が実施されているか。

A委員：評価点〔4〕

管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能している。

教員と事務職員等との役割分担が適切であり、これらの者の間の連携体制が確保され、能力を向上させている。

教育・研究の質的向上のためには、民間からの資金援助を増価させるなどのなお一層の努力が望まれる。

B委員：評価点〔2〕

管理運営はおおむね適切に行われているようですが、事務職員に過大な負担が生じており、人員の増加などによる適切な職員配置が望まれます。

C委員：評価点〔3〕

(優れた点・更なる向上が期待される点)

管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能していると考えます。また、教員と事務職員等との役割分担が適切であり、これらの者の間の連携体制が確保され、能力を向上させる取組が実施されていると考えます。

(改善を要する点)

非常勤職員の雇い止めにより、円滑な学部・学科事務の遂行に支障をきたしていることは気になります。正規職員を雇うことを望みます。

D委員：評価点〔2〕

報告にも書かれているが、新規事業の取り組みをせざるを得ない中、財務・人事の体制を整えきれないまま行わざるを得ないことに同情します。

本来の教育・研究に力を注げる体制と支援ができないものか。

【基準10】教育情報等の公表について

理学部の教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされているか。

A委員：評価点〔4〕 Webサイトの理学部教員紹介、理学部ニュースなどにより理学部の教育研究活動等が適切に公表されている。 また、「サイエンスカフェin静岡」による学外への啓蒙活動も行われている。 この活動が継続されることが望まれる。
B委員：評価点〔4〕 自己評価報告書、外部評価報告書がウェブサイトに掲載されていること、また、教員の研究成果がいろいろな形で発信されていること、などより、良好であると判断します。
C委員：評価点〔4〕 (優れた点・更なる向上が期待される点) 情報を適切に公表し、説明責任を果たしていると考えます。 (改善を要する点) 県内の他大学と比べ、高校の進路担当との交流が希薄であると思っています。 労力とお金がかかることですが、もっと高校に足を運んでいただくと幸いです。
D委員：評価点〔4〕 自学での教育・研究のみならず、出前講義、サイエンスカフェなどよく頑張っておられますし、魅力的に感じます。

【基準11】研究活動の状況及び成果について

理学部の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能しているか。

理学部の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっているか。

A委員：評価点〔4〕 研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能していると考えられる。 サイエンスカフェの講演内容やHPの理学部ニュースなどから見る限り、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっていると考えられる。
B委員：評価点〔4〕 研究活動を支援するための様々な補助金の制度が作られています。研究活動のための体制は適切に整備されていると判断します。
C委員：評価点〔4〕 (優れた点・更なる向上が期待される点) 研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能していると考えます。また、研究活動も活発に行われており、研究の成果が上がっていると考えます。 (改善を要する点)

他大学との比較が無いいため、受託件数・受賞内容・科学研究費補助金等が多いのかどうかの判断をすることが困難でした。外部の者でもわかる指標等の用意を望みます。

D委員：評価点〔3〕

限られた予算と人員の中でよく成果を出されていると思います。補助金については、科研費だけでなく広く民間を含めトライされたらよいと思います。そのための特許等にも力を入れて研究成果の魅力のアピールを試みるのが有効かと思っています。

【基準12】地域貢献活動の状況について

本学及び理学部の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げているか。

A委員：評価点〔4〕

静岡サイエンススクール、地元高校への出前授業、地元自治体からの要請を受けた防災研究や講演会など、地域貢献活動は適切に行われ、成果を上げている。

B委員：評価点〔4〕

「サイエンスカフェin静岡」、「未来の科学者養成スクール」など活発な地域貢献活動がなされています。

一部の教員に負担が集中しすぎることのないようにすることを望みます。

C委員：評価点〔4〕

(優れた点・更なる向上が期待される点)

地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げていると考えます。

(改善を要する点)

報告書を読むと、「高校の要請により高校出張授業を継続していく」となっているが、そうではなく、大学側から能動的に高校側へ動きかける姿勢があってもよいのではないかと思います。

D委員：評価点〔4〕

先の10にも書きましたが、豊かな静岡の自然と特徴を生かした仕事の地域への還元、よくやっておられると思います。

【基準13】国際化の状況について

理学部の目的に照らして、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げているか。

A委員：評価点〔4〕

創造理学コースの学生の、短期グローバル研修の参加者が増加していることは、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げているとの現われと思われる。

理科学系の語学力の向上には、知りたいことと伝えたいことが明確に理解されていることが必須であるので、専門知識の習得が必要不可欠である。その意味で、理学部の目的に適っている。

B委員：評価点〔3〕

外国人教員の在籍、多くの海外派遣など、以前に比較して国際化は進んでいると判断します。

C委員：評価点〔4〕

<p>(優れた点・更なる向上が期待される点)</p> <p>教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げていると考えます。</p> <p>(改善を要する点)</p> <p>国際化を促進するためにも外国語による授業の増設を望みます。</p>
<p>D委員：評価点〔3〕</p> <p>国際化が静岡大の実力向上に働くように相手も選べるようになればと思います。外国というのがアジアに傾きすぎな気がしますが、誤解でしょうか。</p>

総合評価

<p>A委員</p> <p>静岡大学の理念と目標に沿った教育研究体制が整備され、十分な成果が出ていると判断される。</p> <p>大学再編へと向かう流れの中では、「自由啓発・未来創成」を高く掲げ、なにものにもとらわれない独創的な考え方を持つ、若手研究者の育成に主眼を置いた理学部の運営に心掛けていただきたい。</p> <p>研究設備の老朽化に対しては、原理的な部分を教育するのには適していると思われるが、実社会に出てからの活動の即応性を考えると問題があるので、民間の力も借りて適宜最新の装置の導入・利用を検討すべきであると考えられる。</p>
<p>B委員</p> <p>今回の自己評価について、詳細にわたり丁寧な自己評価書が作成されています。これにより、大学の教育研究から社会貢献まで適切な活動がなされていることがわかりました。</p> <p>新しい試みも多く導入されているようですが、大学における教育研究活動は地道であり、その成果に関する評価には本来長い時間がかかるものだと思います。人的資源も時間も有限の中、多くのことに取り組みすぎて疲弊してしまわないことを望みます。</p>
<p>C委員</p> <p>すべての評価項目について、適切な自己評価が行われていると考えます。</p> <p>静岡大学は静岡県の研究・教育等の拠点であることから、自負と誇りを持って、日々の研究・教育活動等に励み、更なる飛躍を遂げてほしいと思っております。そのためにも、自己評価・外部評価を丁寧に分析し、改善すべき点については早期に解決し、次のステップに進むことを願っています。</p> <p>静岡県には理学部出身の高校教員がたくさんいます。我々理学部OB教員は、大学を卒業しても、進学指導等の関係で、常に静岡大学の存在を意識しながら教員生活を送っています。静岡大学理学部の発展は、励みになり、また、自信を持って理学部に生徒を送り込むことができます。国立大学に対する国や世間からの視線は厳しいものがあるとは思いますが、前を向き、世界に目を向け、頑張りたいと思います。</p> <p>心から静岡大学理学部の皆様の御活躍を祈念しております。</p>
<p>D委員</p> <p>2大学化に対する懸念が他の委員から出ましたが、私も本当に本学の学生・教員のためには何が良いのかを考えると心配であります。豊かで大らかな静岡というブランドは思った以上に日本にとっても 大切ではないかと感じています。</p>

VI あとがき

令和元年6月27日に開催された外部評価委員会では、静岡大学理学部の教育研究活動について、平成27年度から平成29年度の3年間を中心に、学外の有識者の方々から評価をしていただきました。これに先立ち、理学部自己評価委員会では、昨年度に様々なデータや資料の収集・整理と分析を行い、外部評価のための基礎資料となる自己評価報告書を作成しました。外部評価委員会当日にいただきました外部評価委員の方々からのご意見ならびに、後日送付いただいた外部評価結果調査票におきまして、自己評価書の各項目に対して、評価できる点と改善すべき点も含めて、多くの励ましのお言葉や今後につながるご意見を頂戴したことは、自己評価委員会としましては大きな喜びです。

今回、外部評価委員の皆様からは、理学部が行ってきた様々な取組みに対して、「十分に達成している。」あるいは「概ね達成している。」との高い評価をいただきました。特に、前回と前々回には厳しい評価をいただいた「国際化の状況」に対しても、このような評価をいただけたことは、大きな励みとなるものです。また、今回の外部評価委員会は、学外の方からの客観的で率直なご意見を聞く普段にはない貴重な機会であり、理学部の教職員にとって大きな刺激となり有意義なものとなりました。理学部の教職員の日々の教育や研究、学生支援、地域貢献、広報などへの取組みに対して一定の評価をいただけたと受け止めさせていただく一方で、今後は、今回いただいたご意見・ご指摘を改善目標として反映させ、理学部の教育研究活動の一層の充実を図っていく所存です。

最後に、外部評価委員の方々には、ご多忙中にもかかわらず、事前に自己評価報告書に目を通していただき、委員会席上あるいは外部評価結果調査票による数多くの貴重なご指摘やご提言をいただきました。心より御礼申し上げます。また理学部の教職員には、自己評価報告書作成のための資料・データの提供や収集などのご協力をいただきました。この場を借りて皆様に感謝申し上げます。

令和元年 8 月

静岡大学理学部令和元年度自己評価委員長
土屋麻人

静岡大学理学部 外部評価委員会 2019

令和元年6月27日

静岡大学理学部A棟大会議室

基準 1 組織の目的

◆ 理学部の理念

自然の真理の解明という人類共通の夢に向けて、その探求に情熱を傾け、幅広い分野における科学の進展と応用を目指して教育と研究を進めること。さらにそれによって人類の幸せに寄与すること。

◆ 教育の目的

この理念を実現するため、本学部は、理学の各専門分野において確かな基礎学力をもつと同時に、幅広い教養を身につけた研究者、技術者、教育者等として社会に貢献できる人材育成を目的とする。また、創造理学（グローバル人材育成）コースでは専門分野の基礎知識のほか、英語による情報収集と自ら発信する国際感覚を持ち、修得した知識及び技術を社会に活かし、活躍できる人材の育成を目的とする。

◆ 学校教育法：大学

第52条 大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。

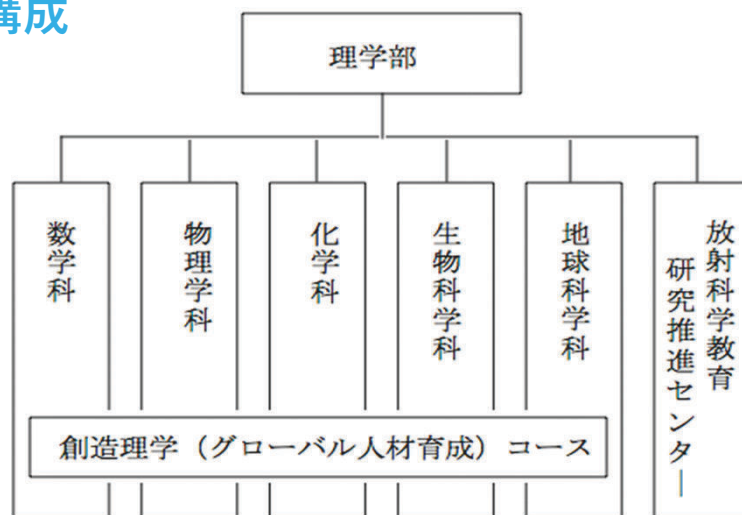
◆ 教育の目標に向けての取組

研究者・技術者・教育者などとして有為な人材を育むことを目標に、以下の取り組みを行う。

- 多様な基礎学問体系の専門教育および幅広い教養教育の実施
- 学生の個性・自主性の尊重
- 充実した学生生活を目指した個人対応教育の実施
- 大学院への進学を視野に入れた高度な専門教育の推奨
- 学生の意見の授業へのフィードバック
- 指導教員制と学生相談室による心のケア
- 進路相談・資格取得・インターンシップ制度等によるキャリアアップ支援
- 国際性豊かな人材育成を目指した環境整備
- 高等学校・中学校教員や学芸員になるための課程整備や放射線安全教育の実施

基準 2 教育研究組織構成

◆ 教育研究に係る組織構成



➤ 基礎科学の主要な分野に固有の教育を実施するための体制を組織

➤ 創造理学コース (平成28年度に導入)

入学時には学科を決めず二年次進級時に専門とする学科を決める方式を取り、自主的な研究者の育成、先端科学・イノベーション・社会への視点の涵養、国際的視点と科学英語力の養成を目標に教育を行っている。

➤ 放射科学教育研究推進センター

放射科学の幅広い知識を併せ持つ人材の育成を目的とし、理学部の各学科 (数学科を除く) を横断した放射科学の教育を行なっている。

◆ 教育活動を展開するための運営体制

理学部各種委員会の委員構成

委員会等	役職指定	数	物	化	生	地	創	放
運営委員会	学部長、副学部長	○	○	○	○	○	○	○
部内入試委員		○	○	○	○	○	○	—
部内教務委員会		○	○	○	○	○	○	○
部内学生委員会		○	○	○	○	○	○	—
部内経理委員会		○	○	○	○	○	○	○
部内自己評価委員会		○	○	○	○	○	—	○
部内広報委員会	副学部長	○	○	○	○	○	○	○
放射科学センター運営協議会	学部長、センター長	○	○	○	○	○	—	○
放射線障害防止委員会	センター長、主任者衛生管理者、管理担当者、安全管理要員、3実験区域責任者、事務長	—	○	○	○	○	—	○
部内国際交流委員会		○	○	○	○	○	○	○
部内図書委員会		○	○	○	○	○	○	—
天城フィールド・セミナーハウス運営委員会		○	○	○	○	○	○	○
部内計測機器委員会		○	○	○	○	○	—	○
部内FD委員会		○	○	○	○	○	—	—
理学部同窓会連絡委員会		○	○	○	○	○	—	○
学部情報化WG		○	○	○	○	○	—	—
部内施設マネジメントWG	学部長	○	○	○	○	○	○	○

➤ 各委員会は、5学科、創造理学コース及び放射科学センターの各々から基本的には1名ずつ選出された教員で構成されているので、理学部全体の構成員の意見が反映、保障されている体制といえる。

➤ 毎月開催される理学部教授会において、全学の主要な会議である教育研究評議会や企画戦略会議、全学教育基盤機構会議等の大学運営に係る重要事項が報告され、構成員と大学執行部との意思疎通が図られている。

基準 3 教員及び教育支援者等

◆ 教育活動を展開するための教員の配置

理学部専任教員数の内訳（平成30年5月1日現在）

学科等／職位	教授	准教授	講師	助教	計
数学科	5	3	3 (2)	0	11 (2)
物理学科	8	5 (1)	1	1	15 (1)
化学科	7 (1)	6 (1)	2 (1)	0	15 (3)
生物科学科	7	6 (1)	3 (1)	0	16 (2)
地球科学科	5	4 (1)	2	2	13 (1)
放射科学教育研究推進センター	0	2	1	0	3
創造理学(グローバル人材育成)コース	0	2	1	0	3
計	32 (1)	28 (4)	13 (4)	3	76 (9)

(注)カッコ内は女性教員数で内数

- 大学設置基準第13条に定められた理学部に必要な専任教員数は**40名（8名×5学科）**であり、理学部学士課程の専任教員数は、上図のようにそれを上回っている。
- 静岡大学では、令和3年度における女性教員比率の目標値を**16%以上**としている。理学部の女性教員の割合は専任教員全体の**約12%**であり、女性教員比率の増加を促進すべく、女性教員採用加速制度の適用を行っている。

常勤教員・非常勤教員担当別の平成30年度開講理学部専門科目数

	必修科目		選択科目	
	常勤	非常勤	常勤	非常勤
数学科	20	0	15	6
物理学科	23	0	11	3
化学科	18	1	16	3
生物科学科	16	0	16	5
地球科学科	22	0	24	8
計	99	1	82	25

▶ 主要科目（必修科目）の
ほぼ100%を常勤教員、約68%を
専任の教授と准教授が担っている。

理学部専任教員の年齢構成（平成30年5月1日現在）

年齢	人数
30歳以上～35歳未満	5
35歳以上～40歳未満	7 (2)
40歳以上～45歳未満	13 (1)
45歳以上～50歳未満	13 (2)
50歳以上～55歳未満	11 (1)
55歳以上～60歳未満	19 (3)
60歳以上	8
計	76 (9)

▶ 40歳未満の若手教員が他の年齢層に比較して少なく、若手教員の安定的なポストを拡大する必要があり、教員採用の際には、准教授、専任講師または助教の職階を指定した公募が行われている。

◆ 教員の採用及び昇任

- 教員の採用は公募が原則
- 応募者が提出する書類は、教育・研究指導についての抱負、従来の研究の概要と将来の研究計画、研究業績及び経歴等
- 応募書類より担当すべき科目の研究及び教育の適性の有無や程度を、面接や紹介者への連絡を含めて判断し、学士課程における教育上の指導能力の評価を行っている。
- 昇任は、担当授業科目や学士課程指導学生数、修士課程研究指導学生数などの教育業績と研究業績に基づく教育研究指導能力、管理運営への貢献度を配慮して行っている。

◆ 教員の教育及び研究活動等に関する評価

- 教員は半期ごとに「活動状況報告書」を理学部長へ提出
 - ・教育、研究、社会・国際連携及び管理運営にかかわる活動について特記すべき事項を記載
- 教員は年度ごとに教育研究の業績等を教員データベースに入力
- 理学部人事評価委員会（理学部長、副学部長2名、事務長から構成）は、「活動状況報告書」と理学部・研究所等からの推薦に基づいて、教員の活動について評価を行っている。評価の際に、教員データベースも参考にされ、評価結果は処遇（昇給、勤勉手当）に反映されている。

◆ 教育支援者の配置

教務系職員の人数と分類（平成30年5月1日現在）

	職員	非常勤職員	派遣職員	計
教務系職員数	3	2	0	5
教室付職員等	0	6	0	6
計	3	8	0	11

- 理学部の教育課程を展開するために必要な業務処理と厚生補導等の学生支援を行う。
- 対象となる理学部学生は963人である（平成30年度）。
- 総合科学技術研究科理学専攻（修士課程）の学生161人及び創造科学技術大学院（博士課程）静岡キャンパスの学生71人の教務と学生支援業務も行っている。

◆ 教育補助者の活用

平成29年度のT A採用人数

学科等名称	採用人数（名）
数学科	8
物理学科	9
化学科	24
生物科学科	33
地球科学科	13
放射科学教育研究推進センター	10
情報処理	13
計	110

- 大学院学生をT Aとして採用し、学部学生に対する実験、実習及び演習等の教育補助業務に従事させ、学部教育の充実と大学院学生への教育トレーニングの機会を提供している。

基準 4 学生の受入

◆ 理学部の入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）

育てる人間像

高い専門性ととともに幅広い教養・豊かな人間性・国際感覚を身に付けた社会に貢献できる人を育成します。

目指す教育

自然界の真理の探究、科学の進展と応用を通じて人類の幸せに寄与することを目指した教育を行います。

入学を期待する学生像

知的好奇心や探究心を強く持って未知へ挑戦する情熱ある人の入学を期待します。

◆ 学生の受入方法

- 入学者受入方針に基づいて学生を受け入れるため、**一般入試**（前期日程及び後期日程）、**A O入試**、**推薦入試**、**私費外国人留学生入試**及び**ABP（アジアブリッジプログラム）**の入試を実施している。
- 一般入試では、**センター試験**において大学教育を受けるのにふさわしい基礎学力等を判定し、**個別学力検査**において専攻分野で必要とされる基礎的、応用的学力や適性等を測るための問題や小論文を課している。
- 推薦入試及びA O入試では、一般的な学力試験だけでは把握できない意欲、適性、コミュニケーション能力等をみるために、学科の特性に応じ、**複数の教員による個別または集団面接**を行っている。

◆ 実入学者数と入学定員の比較

平成25～29年度の入学定員に対する学科ごとの実入学者の比率

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平均
数学科	1.06	1.11	1.00	1.00	1.03	1.04
物理学科	1.02	1.00	1.00	1.02	1.00	1.01
化学科	1.07	1.00	1.00	1.00	1.00	1.01
生物科学科	1.02	1.00	1.02	1.00	1.02	1.01
地球科学科	1.00	1.02	1.04	1.02	1.00	1.02
創造理学コース				1.00	1.05	1.03
平均	1.03	1.03	1.01	1.01	1.02	1.02

- 入学定員の充足率はほぼ1を保っている。
(0.7倍以上1.3倍未満に収まっている。)

基準 5 教育内容及び方法

◆ 学位授与の基本方針（ディプロマ・ポリシー）

理学部は、自然の真理の解明に情熱を傾け、幅広い分野における科学の進展と応用を目指して研究を進めることで人類の幸せに寄与することを理念とする。この理念に基づき当学部では、理学の各専門分野において確かな基礎学力を有すると同時に、幅広い教養を身につけた研究者・技術者・教育者などとして社会に貢献できる人材の育成を目的として教育を行う。この理念と目的に沿って設定された授業科目を履修し、必要単位数を取得することによって、下記に示す品格と能力を身につけたものに学士（理学）の学位を授与する。

1. 幅広い教養と複眼的視野、および健全な批判精神と倫理観を備えている。
2. 理学の各分野における確かな基礎知識と論理的思考力を有し、専門的な立場から現代社会の諸問題の解決に積極的に取り組むことができる。
3. コミュニケーション能力と国際感覚を持ち、グローバルな観点から行動できる。

◆ 教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）

理学部の学位授与の基本方針（ディプロマ・ポリシー）に基づいて、理学部学生が体系的かつ主体的に学習できるよう履修プログラムを編成する。このプログラムでは以下の項目が達成されるよう、学科ごとの方針に応じて設定された講義、演習、実験、実習、フィールドワーク、あるいは卒業研究を実施する。

1. **教養科目**等を学ぶことにより、幅広い教養と国際感覚を養う。
2. **理系基礎科目**等を学ぶことにより、理学における基礎知識を分野横断的に身につける。
3. **理系専門科目**等を学ぶことにより、各専門分野における高度な知識や思考力、実験法、技術等を修得する。
4. **卒業研究**を通じて、新たな課題を主体的に見出し、それを知識や思考力、技術を活用して探求し解決する能力を涵養するとともに、協調性や倫理観、コミュニケーション能力、表現力を身につける。
5. **資格科目**等を学ぶことにより、教員や学芸員などの資格を取得する。

		科目区分	小科目区分	必修単位数	選択単位数	履修年次	
学部教育科目	学科専門科目	学科専門講義科目		数学科 46(40)	数学科 24(24)	1~4	
		演習科目		物理学科 52(46)	理学科 12(12)		
実験科目			化学科 44(38)	化学科 19(19)			
実習科目			生物科学科 37(31)	生物科学科 24(24)			
卒業講究・卒業研究			地球科学科 43(39)	地球科学科 22(22)			
専門科目	創造理学コース科目	創造理学コース講義科目		数学科 0(10)	数学科 0(6)	1~4	
		演習科目		物理学科 0(10)	理学科 0(6)		
実習科目			化学科 0(10)	化学科 0(6)			
卒業研究			生物科学科 0(10)	生物科学科 0(6)			
			地球科学科 0(10)	地球科学科 0(6)			
全学教育科目	理系基礎科目	数学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ		数学科 0(0)	数学科 12(12)	1~2	
		物理学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、物理学実験		物理学科 9(9)	物理学科 12(12)		
		化学Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、化学実験		化学科 9(9)	化学科 8(8)		
		生物学Ⅰ、Ⅱ、生物学実験		生物科学科 12(12)	生物科学科 10(10)		
		地球科学Ⅰ、Ⅱ、地学実験		地球科学科 11(11)	地球科学科 10(6)		
		機器分析科学入門Ⅰ、Ⅱ					
	教養科目	基軸教育科目	学部指定履修科目	英語	2(2)		1~4
				新入生セミナー		0~2(0~2)	1
				情報処理		0~2(0~2)	1
				健康体育		0~2(0~2)	1~4
初修外国語			1(1)		1~3		
キャリア形成科目				1			
現代教養科目		個別分野科目<人文・社会分野>	8(8)		1~3		
		学際科目	4(4)		2~3		
教養科目 総計				15(15)	12(12)		
自由科目				数学科 15(5) 物理学科 12(2) 化学科 17(7)	生物科学科 14(4) 地球科学科 11(3)		
卒業所要総単位数				124(124)			

◆ 教育課程の編成

➤ 教養科目

・ 基軸教育科目

在学中あるいは卒業後にも必須となる基本技能・素養・実践力・国際感覚を身に付けるための科目である。

・ 現代教養科目

各専門分野と有機的に関連させて幅広い教養を習得するための科目である。

➤ 専門科目

・ 理系基礎科目（各学科に共通）

・ 理系専門科目（各学科に分かれる）

専門性を重視した多様な授業科目を配置
教員免許、学芸員、放射線取扱主任者等の資格取得に必要な資格科目も含まれる。

カッコ内数字は各学科創造理学コースの学生

◆ 教育課程を展開するための授業形態・学習指導法

- 数学科においては、高校数学から大学数学への橋渡しの科目を展開している。
- 生物科学科・地球科学科ではフィールド実習を多く取り入れる等の工夫がされている。
- 数学科以外の4学科では1～3年次に学生実験が課されるが、TA制度の活用により、きめ細かい指導が可能となっている。
- 生物科学科には早期研究室配属プログラムがあり、平成27年度5名、平成28年度14名、平成29年度6名の参加があった。
- 創造理学コースの「創造理学実践演習II」でも早期研究室配属が行われ、平成29年度には20名の履修があった。

他学部科目の履修状況

	平成27年度		平成28年度		平成29年度	
	学生数	単位数	学生数	単位数	学生数	単位数
人文社会科学部	15	56	16	68	12	48
教育学部	6	18	15	42	9	24
農学部	3	9	0	0	0	0
工学部	0	0	1	6	0	0
情報学部	1	6	0	0	0	0
計	25	89	32	116	21	72

➤ 他学部科目は自由科目として単位を認定

早期履修制度を利用した学生数と総修得授業科目数

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
数学科	1人 (1)	4人 (4)	6人 (10)
物理学科	8人 (19)	9人 (15)	6人 (8)
化学科	32人 (63)	17人 (37)	37人 (68)
生物科学科	9人 (22)	10人 (20)	10人 (33)
地球科学科	0人 (0)	0人 (0)	4人 (7)
計	50人 (105)	40人 (76)	63人 (126)

➤ 早期履修制度

大学院入学前に大学院講義を受講し、修士課程での特別研究に備えた勉強を開始する。

(注) カッコ内数字は総修得授業科目数を示す。

◆履修指導・支援

- 新入生ガイダンス、学年別ガイダンス等による組織的な学習指導を毎年4月に実施することにより、学生が適切に履修選択を行えるよう指導している。
- 平成25年度からは履修科目の上限設定（CAP制）を導入した。
- 複数担任制（主及び副指導教員を配置）がとられており、自主学習に関する相談体制と単位の修得状況の監視体制（学務情報システムを利用）が整備されている。
- 年間を通じてスムーズに科目を履修できるように学科ごとに「進級・履修等に関する基準」を設定している。
- 全学的に実施されている成績不良の要指導学生に対する対応も適切に実施しており、学生一人一人の状況を把握して成績改善のアドバイス等を行っている。

◆成績評価

- 成績評価及び単位認定は、担当教員個人に判断によって、試験、小テスト、レポート及び授業への出席状況や受講態度等を総合して評価している。秀（90点以上）、優（80点から90点未満）、良（70点以上80点未満）、可（60点以上70点未満）、不可（60点未満）の5段階で評価し、秀、優、良、可を合格としている
- 学生のGPA（Grade Point Average）値は全学の基準に基づいて自動的に計算され、学務情報システムで随時参照可能である。

基準 6 学習成果

◆ 学生が身に付けた学力・資質・能力

学位取得状況（入学者が学位取得に要した在籍期間）

入学年度	入学者数	標準修業年内卒業者数	率	「標準修業年限×1.5」内卒業者数	率
平成24年度	223	185 (27年度卒業)	83.0%	201 (~29年度卒業)	90.1%
平成25年度	222	190 (28年度卒業)	86.4%	—	—
平成26年度	220	186 (29年度卒業)	84.5%	—	—

➤ 80%超の入学者が4年で学士の学位を取得。

教員免許取得状況

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
中学校一種免許(数学)取得	20(55%)	4(11%)	9 (26%)
中学校一種免許(理科)取得	11(7%)	11(7%)	19 (13%)
高校一種免許(数学)取得	25(69%)	15(43%)	18 (51%)
高校一種免許(理科)取得	31(21%)	27(17%)	29 (19%)

➤ 数学科では学位取得者の約50%、他学科では約20%が高校一種免許を取得。

（注）カッコ内の数字は、数学科の学位取得者に対する免許(数学)取得者数の割合（%）、または、数学科を除く他の学科の学位取得者数に対する免許(理科)取得者数の割合（%）。

放射線取扱主任者試験（一種及び二種）の合格者数

	一種合格者数	一種合格者内訳	二種合格者数	二種合格者内訳
平成27年度	10	1（物理）、4（化学）、 2（生物）、3（地球）、	2	1（化学）、1（地球）
平成28年度	6	4（化学）、2（地球）	2	1（生物）、1（地球）
平成29年度	9	2（物理）、4（化学）、 1（生物）、2（地球）、	1	1（化学）

◆ 教育内容に関する総合的な満足度（％）

		とても満足	満足	どちらでもない	不満	とても不満
教育内容の総合的な満足度	1年生	6	42	37	10	5
	2年生	9	49	31	7	4
	3年生	6	49	32	10	3
	4年生	10	52	25	10	3

アンケート回答数：1年生 172人、2年生 113人、3年生 110人、4年生 92人

- とても満足＋満足が不満＋とても不満を大きく上回り、**学生は教育内容に概ね満足していることがわかる。**

◆ 卒業生の進路選択

	卒業生	進学率		就職率		就職希望者就職率	
		進学者数	割合(%)	就職者数	割合(%)	就職希望者数	割合(%)
平成29年度	212	109	51.4	94	44.3	97	96.9
平成28年度	213	103	48.4	97	45.5	103	94.2
平成27年度	213	90	42.3	107	50.2	116	92.2
平成26年度	206	97	47.1	89	43.2	106	84.0
平成25年度	214	104	48.6	95	44.4	109	87.2

- 平成26年～29年度の就職者の内訳
企業等73.1%、公務員11.9%、
教員14.7%(57名)

進学率 = 進学者数 / 卒業生数を示す。就職率 = 就職者数 / 卒業生数を示す。
就職希望者就職率 = 就職者数 / 就職希望者数を示す。

◆ 卒業生に身についた能力及び就職先での業務(職務)遂行に重要な能力 (%)

アンケート質問事項	身についた能力			業務遂行に重要な能力	
	卒業生*1	企業・官公庁*2	学校関係*3	企業・官公庁*4	学校関係*5
専門分野に関する知識・技術	91.7	66.3	89.1	67.4	96.4
幅広い教養と基礎学力	79.1	89.6	89.1	91.9	96.4
市民としての見識	62.5	65.1	70.9	65.0	98.2
英語の能力	45.9	33.8	45.5	36.0	65.5
問題発見/分析/解決能力	75.0	80.2	67.3	95.7	98.1
文章読解・表現能力	66.7	81.4	72.7	89.9	98.1
プレゼンテーション能力	75.0	69.7	72.8	81.7	94.6
コミュニケーション能力	70.8	81.4	78.2	97.5	100
情報通信技術活用能力	54.1	50.0	78.2	59.9	92.7
国際的視野	33.3	29.0	45.4	47.8	80.0
リーダーシップ	70.8	56.9	58.2	89.9	96.4
チームワーク	75.0	87.2	90.9	97.8	100

▶ 企業・官公庁が業務遂行に重要な能力にあげた項目が理学部卒業生の就職先の企業・官公庁が卒業生に対して身に付いていたと思う能力とほぼ重なる。

*1) アンケート回答数24 理学部平成27年度卒業生。*2) アンケート回答数86 過去5年間の理学部卒業生について。*3) アンケート回答数55 出身学部の分類なし。*4) アンケート回答数850 出身学部の分類なし。*5) アンケート回答数55 出身学部の分類なし。

基準 7 施設・設備及び学生支援

◆ 学習支援に対する満足度※

項目	満足(%)	不満(%)
図書館の設備(蔵書やレファレンスサービス)	67.3	11.0
実験室の設備や器具	48.3	12.3
コンピュータの施設や設備	53.3	10.7
コンピュータの訓練や援助	36.3	20.7
インターネットの使いやすさ	41.3	25.7
総合的な満足度(キャンパス全体としての環境・設備)	34.0	31.0

➤ すべての項目で満足が不満を上回り、**学生は学習支援に概ね満足**していることがわかる。

※満足は「とても満足」または「満足」と答えた割合の合計、不満は「不満」または「とても不満」と回答した割合の合計
(理学専門科目の履修が中心となる2年生から4年生の評価を単純平均)

◆ 教職員との相談体制についての満足度% (学士課程：3年生対象)

満足度	平成28年度 (2年生含む)	平成29年度	平成30年度	平均	アンケート 総数
学習支援や個別の学習指導 ¹⁾	25	20	24	23.0	284
教員と話をする機会 ¹⁾	31	38	29	32.7	285
学生生活全体の充実度 ²⁾	78	86	84	82.7	289

➤ 教員と話をする機会の満足度は4年生では46%に増加。

1) 「とても満足」と「満足」の総和

2) 「充実している」と「まあまあ充実している」の総和

◆生活支援についての満足度% (学士課程：3年生対象)

満足度	平成28年度 (2年生含む)	平成29年度	平成30年度	平均	アンケート 総数
インターネットの使いやすさ	49	38	48	45.0	283
奨学金などの学費援助の精度	26	23	33	27.3	284
健康・保健サービス	43	39	50	44.0	284
レクリエーション施設	15	18	21	18.0	284
学生生活支援(総合)	—	—	47	47.0	109
キャンパス環境・設備(総合)	—	—	40	40.0	110
住まいに関する情報提供(総合)	—	—	37	37.0	110
食事に関する環境の整備(総合)	—	—	46	46.0	110

* 「とても満足」と「満足」の総計

◆進路支援についての満足度% (学士課程：3年生対象)

満足度	平成28年度 (2年生含む)	平成29年度	平成30年度	平均	アンケート 総数
卒業後就職するための準備の割合 ¹⁾	45	46	51	47.3	305
将来の仕事と授業内容の結びつき	36	29	33	32.7	286
キャリアカウンセリング	12	19	24	18.3	283
国際交流支援(総合)	—	—	29	29.0	109
就職・進学支援(総合)	—	—	35	35.0	109

* 「とても満足」と「満足」の総計、1) 能力や知識が「大きく増えた」と「増えた」の総計

➤ 生活相談

- ・ 保健センター 健康
 - ・ 学務部学生生活課 奨学金
 - ・ 学生相談室 各種ハラスメント
- 学生相談室には、理学部からも学生相談員として参加
- 「オピニオンボックス」の設置により学生の意見を把握

- 就職や進学などの**進路相談**は指導教員や各学科の就職委員などが当たる。
- 理学部でも就職委員会が中心となり、独自の求人情報の提供や就職関連セミナー開催等を行っている。
- **インターンシップ**は単位化されており、教務委員会と学務係が窓口となって対応している。

◆ 学生に対する経済的支援

年次別奨学金受給件数

		平成27年度	平成28年度	平成29年度
日本学生支援機構 の奨学金	第一種	156	170	195
	第二種	173	153	148
その他の奨学金		4	4	5
計		333	327	348

➤ 1/3 程度の学生が奨学金を受けている。

年次別入学料・授業料免除件数

		平成27年度	平成28年度	平成29年度
入学料	全額免除者	0	0	0
	一部免除者	0	0	0
前期授業料	全額免除者	56	70	98
	一部免除者	73	65	41
後期授業料	全額免除者	47	57	103
	一部免除者	103	85	43
計		279	277	285

➤ 1/3 程度の学生が授業料免除を受けている。

基準 8 内部質保証システム

◆ 教育の状況についての点検・評価及び教育の質の改善・向上を図るための体制

- 学期の中頃に、授業の履修生に対して「コメントペーパー」を取り、授業の理解度、進み具合の適切さなどを学期間中に把握するように努め、授業の質向上に役立っている。
- 各授業の最終回には「授業アンケート」を受講生に対して実施し、授業担当者はアンケート結果に基づいた評価書「授業アンケート結果」を受け取ることで授業評価がなされている。
- このアンケート結果に基づいて、授業担当者は「授業アンケート結果に応えて」という授業報告書を提出し、授業の自己点検と教育の質向上に役立っている。「授業アンケート結果に応えて」は、理学部FD委員会が学内からアクセスできるウェブサイトに掲載し、受講生へのフィードバックを行っている。

- 平成25年の外部評価からの指摘に応じて改善された事例
 - ・「国際化の状況（一層の努力）」の指摘に対して、創造理学コースの授業科目「**短期グローバル研修**」において香港科学技術大学への派遣している。（派遣学生数：平成29年度16名、平成30年度20名）
 - ・「就職支援体制が不十分」との指摘に応じて、「**静岡大学理学部OB/OGトークセミナー**」を実施し、「**静岡大学理学部産学交流会**」を開催している。
- 理学部長を中心にした、質保証委員会を立ち上げ、FD・SD 担当者と連携しながら、検証を行う体制が整いつつある。

◆ 教員・教員支援者に対する研修

- 理学部FD委員会では、毎年度90%以上の教員がFD研修会に参加する体制を作っている。
- 理学部職員のSD活動参加の一環として、職員がSD関連の研修会・講演会に出席することを要請している。

FD研修会

平成28年度：

「ディプロマ・ポリシーに関する研修会」、「大学入試改革に関する研修会」

平成29年度：

「物理学科・FD活動検討会」、「理学部地球科学科卒業研究関連科目の検討」、

「創造理学実践演習II, IIIの内容の検討」、

「(全学)障害学生講演会」、「創造理学実践演習IIIの内容の検討」、

「学修成果の可視化に関する研修会」、「化学科FD活動検討会」、

「教育成果の検証と学修成果の可視化に関する研修会」、

「第1回数学科ルーブリック作成に関する研修会」、「理学部 ルーブリック Work Shop」、

「第2回数学科ルーブリック作成に関する研修会」、「ハラスメント防止研修会」、

「(学部) 障がい学生支援講演会」

平成30年度：

「ディプロマポリシーの構成要素についての検討会」、

「教育の質保証ガイドラインについての検討会」、「化学科のカリキュラムポリシーの検討会」、

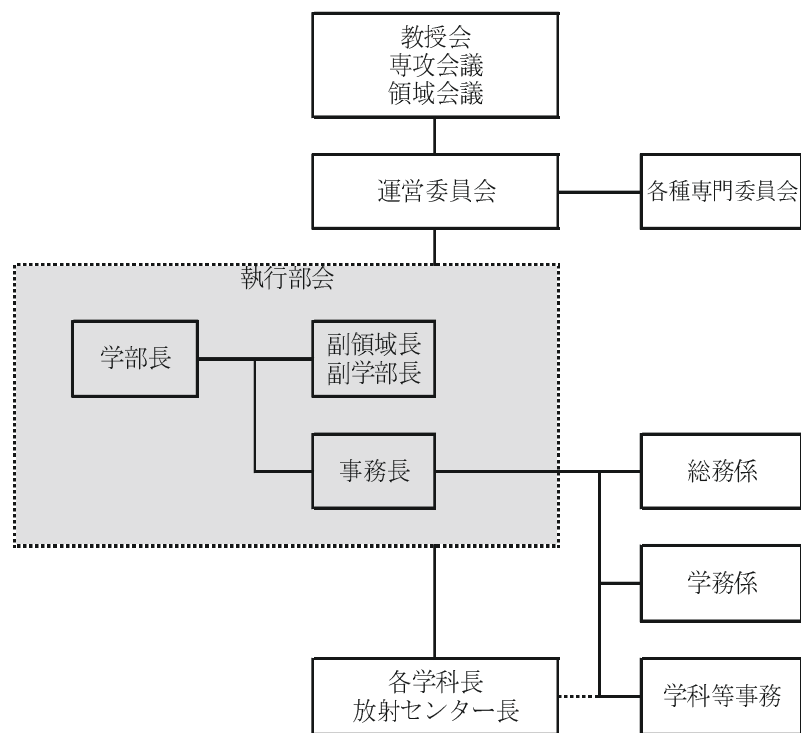
「生物科学科のカリキュラムに関する意見交換会1」、「生物科学科のカリキュラムに関する意見交換会2」、

「生物科学科のカリキュラムに関する意見交換会3」、「反転授業・オンライン授業等の説明会」、

「高等教育の将来デザインと教育の質保証について」

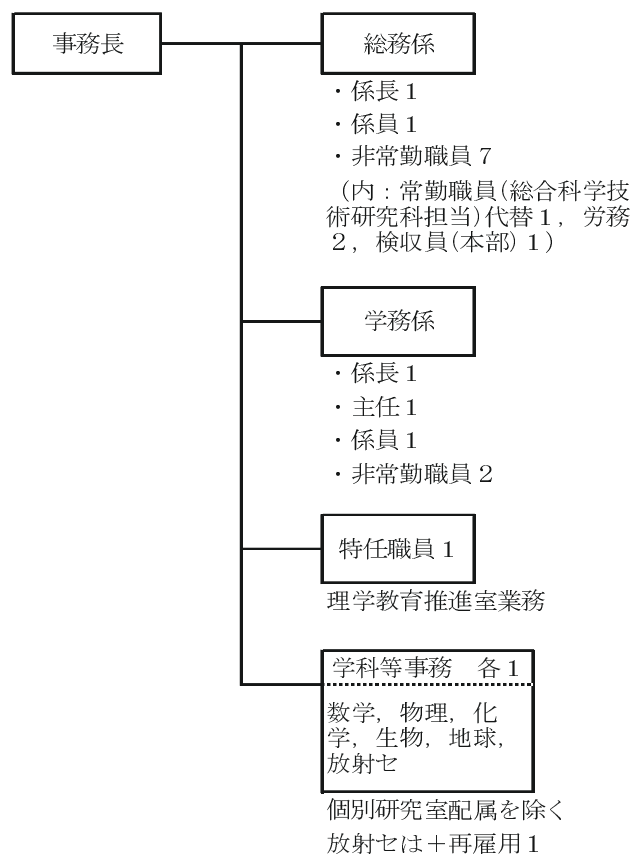
基準 9 財務基盤及び管理運営

◆ 理学部の管理運営のための組織



- 重要議題は各専門委員会で十分審議されたのち、学部長のリーダーシップのもと**執行部会**、**運営委員会**（各学科長・放射センター長・創造理学コース長）、**教授会**の順に審議され、効果的な意思決定ができる仕組みとなっている。

◆ 理学部の事務組織



※平成30年9月現在

- 新規事業へのサポート体制が不十分な状況で、特に A B P ではSkypeを利用した面接入試、A B P 奨学金制度等の新しい取組みを行っているが、それら業務への事務体制が未整備のまま実施されたため、関連部署に過大な負担が生じている。
- A B P 業務に限らず、昨今の業務が多様化する中で、現状はとても適正な職員の配置がなされているとは言い難い。

基準 10 教育情報等の公表

- 理学部の目的、入学者受入方針、教育課程の編成・実施方針及び学位授与方針の公表
 - ・ 社会に対して ウェブサイトへの掲載、理学部案内や募集要項等の配布
 - ・ 構成員に対して ウェブサイトへの掲載、学生便覧等の配布
 - ・ 在学生に対して ガイダンス
- 理学部自己評価報告書と外部評価報告書を静大ウェブサイトに掲載

- 理学部ウェブサイトにおける公開
 - 入学者数、在学者数、卒業生数
 - 理学部卒業就職者数・進学者数・主な就職分野
 - 理学部ニュース(最新の教育研究活動の状況、受賞など)
 - 理学部教員の教育研究活動状況に関する分析結果
- 各教員の教育研究活動を社会へ発信
 - 教員データベース、各学科のホームページ、サイエンスカフェ、サイエンスカフェや学部紹介の静大テレビジョンを利用した録画配信
 - 高校への出前講義、オープンキャンパス、プレスリリース
- シラバス（授業の方法、内容、計画）を静大ウェブページに公表
- 教育上の目的に応じて学生が修得すべき知識及び能力に関する情報源として、カリキュラムマップを作成

基準 1 1 研究活動の状況及び成果

◆ 研究活動を実施するための体制

- 研究室や実験室など研究に必要なスペースは所属教員に等しく配分
- 研究資金となる運営費交付金も均等に分配
- これにより、一定の研究スペースと研究資金が担保され、資金を持つ他の教員に依存しなくてもよくなる。
- 新任教員には準備資金（約50万円）が、理学部長裁量経費から支出されている。
- 外部資金獲得の奨励、支援
 - ・ 科学研究費補助金と外部資金に関する説明会を開催
 - ・ 外部資金の公募情報をホームページや学内メールを通じて各教員へ周知
 - ・ 科研費審査員経験者等からなる科研費申請アドバイザーが申請書の書き方を助言
 - ・ 科学研究費不採択者を対象に、優れた課題に対しては一定の研究補助を受けられる「科研費申請再チャレンジ支援経費」（全学）、「外部資金を取得していない教員への研究費の補助」制度（理学部）

- 論文の掲載料や別刷代金などの経費の一部を理学部で補助している。これにより、投稿料の高さで投稿を躊躇することがなくなり、研究成果の公表を積極的に行える。
- 全学的な措置として、「最先端研究推進経費」があり、特にインパクトファクターの高い学術雑誌に掲載された時に配分される。また、「若手研究者支援経費」と「学会等開催支援経費」がある。
- 教員が国内外の大学等で、1ヶ月以上1年以内の期間、研究に専念できる制度である「静岡大学教員特別研修」
- 研究スペースには、学科に配分されるスペース以外に、理学部長が直接管理するものが設けられており、豊富な外部資金を持つ教員がプロジェクト研究を行う際や、理学部として重点的に取り組む課題に取り組む教員には競争的にスペースを配分する施策（使用料は課金される）が取られている。これにより創造的・先進的な研究がより積極的に支援されている。

◆ 研究活動と研究の成果

研究成果の公表状況（件数）

区分	平成27年度	平成28年度	平成29年度	合計
研究論文(査読付)	170	142	143	455
研究論文(査読無)	12	14	21	47
著書等	23	17	8	48
国内学会発表・研究発表	333	338	312	983
国際学会発表・研究発表	72	102	84	258
受賞	3	4	10	17
特許取得数(申請数)	0(2)	0(4)	0(1)	0(7)
新聞・TV等での報道	82	63	49	194

平成27年度～平成29年度において

- 教員一人当たり平均7報の論文・著書・総説を執筆、15件の学会発表
- 理学専攻の教員約2割である16人と1団体が学会賞や学術賞を受賞
- 新聞・TV等での報道が194件

科学研究費補助金の獲得状況

区分	平成27年度		平成28年度		平成29年度		合計	
	件数	金額(千円) 円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
基盤研究(S)	0	0	1	46,700	1	36,500	2	83,200
基盤研究(A)一般	0	0	0	0	0	0	0	0
基盤研究(A)海外	1	8,100	1	8,000	1	4,700	3	20,800
基盤研究(B)一般・特設	6	26,800	6	19,400	8	25,300	20	71,500
基盤研究(B)海外	2	7,600	2	5,600	2	4,100	6	17,300
基盤研究(C)	32	33,600	29	31,500	27	27,500	88	92,600
挑戦的萌芽研究	3	2,600	1	1,500	3	6,500	7	10,600
若手研究(A)	2	15,600	2	10,800	1	3,000	5	29,400
若手研究(B)	10	8,400	8	7,600	6	5,550	24	21,550
新学術領域(計画研究)新規	0	0	0	0	0	0	0	0
新学術領域(計画研究)継続	0	0	0	0	0	0	0	0
新学術領域(公募研究)	1	2,600	0	0	0	0	1	2,600
研究成果公開促進費	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	57	105,300	50	131,100	50	113,150	157	349,550

➤ 継続分も含めて毎年約7割の教員が何らかの科学研究費補助金を獲得

民間との共同研究、受託研究等（件数）

区分	平成27年度		平成28年度		平成29年度		合計	
	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)	件数	金額(千円)
奨学寄附金	25	20,245	29	21,443	23	13,944	77	55,632
共同研究	6	8,392	5	6,875	6	11,940	17	27,207
受託研究・ 受託事業	13	34,365	14	36,972	16	67,875	43	139,212
合計	44	63,002	48	65,290	45	93,759	137	222,051

- 民間からの奨学寄附金、受託研究や民間との共同研究が、基礎研究に主軸がある理学専攻においても比較的活発

基準 1 2 地域貢献活動の状況

- 社会人の就学を支援するための科目等履修生制度、特別聴講生制度
- 地域の一般市民を対象として専門科目の多くを一般公開し、受講者を迎え入れている。
- 一般市民を対象とした「サイエンスカフェ in 静岡」
毎年10回、講演者は理学専攻の教員が中心
参加者は中高生から社会人、高齢者まで幅広い年齢層
- 静岡サイエンススクール（小中高生対象）
サマープログラム、オータムプログラムの年2回
理学部の教員や大学院生が指導
→ 科学技術振興機構の委託事業「未来の科学者養成スクール」へ発展
- 地元高校への出張授業が平成27年度～平成29年度で28件
- SSH指定校からの要請を受け、理学専攻の教員が研究面をサポート
- 自治体からの要請を受け、理学部の教員が防災研究と講演会を実施

基準 1 3 国際化の状況

- 国際化に対応可能な組織体制
 - ・外国人教員が**3名**在籍
 - ・日本人教員のうち、約半数にあたる**37名**の教員が1年以上の海外での教育・研究活動の経験あり。
- 国際学会参加や調査研究・共同研究実施のための教員の海外派遣が**毎年平均70件**以上
- 理学部教員が主催した国際会議が平成25年度～平成30年度で**30件**
- 平成25年度～平成30年度において外国人研究者を延べ**70名**共同研究のために招聘
- 国際共著論文**187編**、国際共著発表**190件**（平成25年度～平成30年度）
- 海外の**8機関**との部局間協定を締結（平成25年度～平成30年度）

- 平成27年度秋よりABP（アジアブリッジプログラム）が始まる。

理学部への留学生入学者数（カッコは内数で非正規生）

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
理学部	2(1)	1(1)	2(1)	2(2)	4(1)	4(3)

非正規生：研究生および短期留学生

- 理学部から外国への派遣留学生数

	平成25年度	平成26年度	平成27年度	平成28年度	平成29年度	平成30年度
理学部	5	6	8	9	6	4

- ・ 夏季短期留学プログラム（ネブラスカ大学、アルバータ大学、朝鮮大学校）
- ・ 大学間協定校への長期・短期留学

- 創造理学コースの2年時の「短期グローバル研修」

- ・ 平成29年度に16名、平成30年度に20名が履修
- ・ 部局間協定校である香港科学技術大学において英語講義参加、学生との交流、研究室訪問

静岡大学理学部 外部評価結果調査票

自己評価報告書の内容及び外部評価委員会での調査・確認内容等に基づき、以下の各基準について、「評価」と「コメント」をお願い致します。

コメント欄には、「優れた点」や「更なる向上が期待される点」、「改善を要する点」を中心にご記入願います。

なお、以下の基準の内容は、基本的に「自己評価結果報告書」に記載されている各基準に沿ったものとなっております。

この調査票は、外部評価委員会後の7月5日（金）までにご提出願います。

各基準の評価は1～4段階で数字に○印を付してください。

- 4：十分に達成している。大いに期待できる水準である。
- 3：概ね達成している。概ね適切・良好である。
- 2：改善が必要である。
- 1：抜本的な改善が必要である。

【基準1】組織の目的について

理学部の目的（使命、教育研究活動を展開する上での基本的な方針、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が学校教育法に規定されている、大学一般に求められる目的に適合するものであるか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準2】教育研究組織構成について

教育研究に係る基本的な組織構成（学科、専攻、その他の組織の実施体制）が、理学部の目的に照らして適切なものであるか。

教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能しているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準3】 教員及び教育支援者等について

教育活動を展開するために必要な教員が適切に配置されているか。

教員の採用及び昇格等に当たって、明確な基準が定められ、適切に運用されているか。
また、教員の教育及び研究活動等に関する評価が継続的に実施され、教員の資質が適切に維持されているか。

教育活動を展開するために必要な教育支援者の配置や教育補助者の活用が適切に行われているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準4】 学生の受入について

入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、それに沿って、適切な学生の受入が実施されているか。

実入学者数が入学定員と比較して適正な数となっているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準5】教育内容及び方法について

①（学士課程）

教育課程方針（カリキュラム・ポリシー）が、学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）と整合的であるか。

教育課程の編成・実施方針が明確に定められ、それに基づいて教育課程が体系的に編成されており、その内容、水準が授与される学位名において適切であるか。

教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されているか。

学位授与方針が明確に定められ、それに照らして、成績評価や単位認定、卒業認定が適切に実施され、有効なものになっているか。

学位授与方針に則して、適切な履修指導、支援が行われているか。

教育課程方針に則して、公正な成績評価が厳格かつ客観的に実施されているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準6】学習成果について

教育の目的や養成しようとする人材像に照らして、学生が身に付けるべき知識・技能・態度等について、学習成果が上がっているか。

卒業（修了）後の進路状況等から判断して、学習成果が上がっているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準7】施設・設備及び学生支援について

教育研究組織及び教育課程に対応した施設・設備等が整備され、有効に活用されているか。

学生への履修指導が適切に行われているか。また、学習、課外活動、生活や就職、経済面での援助等に関する相談・助言、支援が適切に行われているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準 8】 内部質保証システムについて

教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて教育の質の改善・向上を図るための体制が整備され、機能しているか。

教員、教育支援者及び教育補助者に対する研修等、教育の質の改善・向上を図るための取組が適切に行われ、機能しているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準 9】 財務基盤及び管理運営について

管理運営体制及び事務組織が適切に整備され、機能しているか。

教員と事務職員等との役割分担が適切であり、これらの者の間の連携体制が確保され、能力を向上させる取組が実施されているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準10】教育情報等の公表について

理学部の教育研究活動等についての情報が、適切に公表されることにより、説明責任が果たされているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準11】研究活動の状況及び成果について

理学部の目的に照らして、研究活動を実施するために必要な体制が適切に整備され、機能しているか。

理学部の目的に照らして、研究活動が活発に行われており、研究の成果が上がっているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準12】地域貢献活動の状況について

本学及び理学部の目的に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、成果を上げているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

【基準13】国際化の状況について

理学部の目的に照らして、教育の国際化に向けた活動が適切に行われ、成果を上げているか。

[評価] 1 2 3 4

[コメント]

総合評価（全体を通してのコメントをお願い致します）

令和元年〇月〇日

外部評価委員名

〇〇〇〇